

## 研究のまとめ

2025. 12. 12

毎年、研究をしている。教員になってからずっとである。ということは、もう40年になる。教員は、研究と修養に努めなければならないわけだから、当たり前のことではある。研究作品や研究物として形にすることもあれば、そうでないときもある。とにかく、毎年、何かしらの形で研究には携わってきている。

今年度は、幼稚園・こども園会のブロック研究と園での研究との2つに関わってきた。どちらも楽しかった。これが、研究作品として文章にまとめる立場となると、また違ってくる。決して楽しいなどということはないだろう。いわばアドバイザー的な自由な立場からものを言っているからこそ楽しいのである。

さらに分析すると、先生方が納得していく、わかっていく様子を見ているのが楽しいのかもしれない。今までは、手探りかつ暗中模索のような研究の進め方であった。それが、理屈を伴って意図的、計画的に進めることができるようになってきている。きっと、先生方が変わっていくのを見ているのがいいのである。

ブロック研究では、毎回、話し合いの際に、ホワイトボードを用意するようにした。出された考えをホワイトボードに書いていく。すると、思考が進みやすくなる。ホワイトボードミーティングのようなものである。

園での研究では、大きな白い紙を準備した。出された意見をマジックでどんどん書いていく。それを職員室に貼っておく。すると、いつでも戻ることができるし、進むこともできる。非常に便利である。こういった作業では、マジックで書き込む人が、事の正否を左右することになる。何事にも書き方というものがある。

考えてみた。今頃になって、自分の経験が役に立っている。若い頃から取り組んできた個人研究、そして学校としてまとめてきた共同研究などが、今の自分を支えている。数々の失敗が、先生方へのアドバイスとして生きている。

これからどの学校でも、学期末の慌ただしさに加えて、研究のまとめの作業が佳境に入ることだろう。先生方が年間を通して取り組んできたことを形にして残す作業となる。研究は、公表すなわち外部への発信を前提としている。読む人がいるということである。相手意識が求められる。相手に伝わらなければいけない。理解してもらわなければならない。

よくまとめるというが、研究のまとめでは、うまくいったこととそうではないこととを分けることになる。そして、それぞれの要因を分析する。そこから、新たな課題を見出す。研究などしなくても教育活動は毎年、展開される。だが、まとめることで見えてくることがある。だから、日々の教育活動に研究的態度で臨むことには意義がある。